

令和6年度学校教育自己診断の結果と分析

【生徒全体】

昨年度と比較すると、20項目中16項目において、肯定的評価の割合が5%以内の変動に収まっており、全体として学校生活の満足度は概ね維持していると言える。特に「学校は、進路についての情報をよく知らせてくれる。」「ホームルームや授業などで将来の進路や生き方について考える機会がある。」では、肯定的評価の割合が9割を超えており、学校での進路指導には満足していると判断できる。また、「学校は生徒1人1台端末(Chrome book)を効果的に活用している。」については、昨年度より肯定的評価の割合が6.6%上昇し、9割を超えた。これは、授業者の工夫により、1人1台端末を活用した授業が浸透してきた結果であるといえる。

一方、「この学校では、図書館が生徒に活用されている。」では、肯定的評価の割合が7.6%減少し、全項目の中でも2番目に低かった。今後、放課後や休み時間の活用だけでなく、図書館を活用した授業を行うなど、生徒が書籍に親しむ機会を設けていく必要がある。

【1年生】

多くの項目において、昨年より肯定的評価の割合に大きな変化はなかったが、「他の先生が授業を見学に来ることがある。」については前年から14%減少している。教員の自己診断での、「学校内で他の教員の授業を見学する機会がよくある。」における肯定的評価の割合は97.7%であるが、教員が見学する授業に偏りがあった可能性がある。教員に対して、教科や科目にとらわれず、幅広く授業を見学するように促したい。

【2年生】

2年生は、他学年に比べて、全体的に肯定的評価の割合が高く、14項目において前年の割合を上回っている。「先生は、いじめについて私たちが困っていることがあれば真剣に対応してくれる。」や、「外国籍生徒との交流が自然に行われている。」についても昨年度より高く、多様な生徒が安心して学べる環境であると言える。この動きを学校全体に広げていく必要がある。

【3年生】

3年生は、「授業や部活動、学校行事を通じて、他の学校や幼稚園・保育園等との交流の機会が多い。」の項目における肯定的評価の割合が、この3年間で最も高くなっている。今年度、地域の施設を訪問する授業や、部活動において近隣の中学校や大学と合同練習をする機会が増加したことが反映されている。一方、「学校では生活規律や学習規律などの基本的習慣の確立に力を入れている。」については、肯定的評価の割合が3年間で最も低かった。生活規律や学習規律の確立にむけ、粘り強い取組みが一層必要である。

【保護者】

保護者は、「子どもは授業がわかりやすく楽しいと言っている。」については3年連続で、「学校は、いじめについて子どもが困っていることがあれば真剣に対応してくれる。」については4年連続で肯定的な評価の割合が上昇している。授業改善推進委員会の継続した取組みや、教育相談委員会の整備などが、安心して学べる環境づくりにつながってきている。一方で、「学校は、教育情報について、家庭への提供の努力をしている。」「学校は、ホームページに必要な情報を載せている。」の項目についてはいずれも前年を下回った。Webページの更新や公式SNSの開設、さくら連絡網の活用など、積極的な情報提供や情報共有を図っているが、学校に対してさらなるサービスのオンライン化が求められているものと考えられる。授業だけでなく、学校全体のDX化を進める必要がある。

【教職員】

教職員は、「指導内容について、他の教科と話し合う機会がよくある。」「教員の間で、授業方法などについて検討する機会を積極的に持っている。」等、授業改善に関する多くの項目において、肯定的評価の割合が昨年度より増加しており、授業改善推進委員会の取組みが一定の成果をあげている。さらに、「生徒の問題行動が発生した場合、組織的に対応できる体制が整っている。」についても、肯定的評価の割合が昨年度より増加しており、教員が協力して事象に対応する体制も強化されている。一方で、「本校の職場においては、教職員の服務規律への自覚が高い。」については前年度を大きく下回っている。今年度、問題となる事象は起こっていないものの、教職員に対し、服務規律についての説明を丁寧に行っていく必要がある。